



## 答え合わせ・解説

問1	<b>答え 1</b> <b>預金</b>	現代の経済における「通貨」は、手元にある紙幣や硬貨（現金）だけを指すものではありません。銀行などの金融機関に預けられているお金は、振り込みやキャッシュレス決済などを通じて、現金を使わずに代金を支払う手段として機能します。そのため、日本の通貨供給量の大部分は、この形式の通貨によって構成されています。
問2	<b>答え 1</b> <b>銀行などの金融機関が、多くの人々から集めた預金を、資金を必要とする企業などに貸し出すことで資金を融通する仕組み。</b>	銀行が預金者から資金を集め、それを企業に貸し出すことで、貸し手と借り手の間を「なかだち」する役割を担っています。このように、金融機関が介入して資金を調達する仕組みは、日本の経済において企業の主要な資金調達手段の一つとなってきました。
問3	<b>答え 1</b> <b>家計に支払う預金の利率を、企業などへ貸し出す際の利率よりも低く設定することで、その差額を利益としている。</b>	銀行は「金融仲介機関」として、資金が余っている家計などから「預金」としてお金を集め、資金を必要としている企業や個人に「貸し出し」を行います。このとき、預金者に対して支払う利率（預金金利）よりも、貸出先から受け取る利率（貸出金利）を高く設定することで、その差額（利ざや）を主な収益源としています。手数料も利益の一部ではありますが、この金利差による収益が銀行経営の根幹を成しています。
問4	<b>答え 1</b> <b>地方銀行</b>	地方銀行は、特定の都道府県や地域を中心に営業活動を行う民間金融機関です。地域住民（家計）からの預金を、その地域の企業に貸し出す（融資する）という「金融仲介機能」を果たすことで、地元の産業を支え、地域経済の循環を促す役割を担っています。
問5	<b>答え 1</b> <b>利率</b>	銀行は家計から預金という形でお金を集め、それを企業や個人に融資（貸し出し）することで社会の経済活動を支えています。この資金の貸し借りに際して発生する対価を利率（または利息）と呼びます。配当金は株式を保有している企業から利益の分配として受け取るものであり、元金は貸し借りしたお金そのものの額を指します。
問6	<b>答え 1</b> <b>日本銀行が民間銀行に国債を売却することで市場の通貨量を減らし、金利を上昇させて景気の過熱を抑える。</b>	景気が過熱しているとき、日本銀行は保有する国債を民間銀行に売る「売りオペレーション」を行います。これにより、銀行の手元にある資金が日本銀行へ回収されるため、市場に出回る通貨量が減少します。資金が少なくなると金利が上がるため、企業や個人の借入れが抑制され、物価の上昇を抑えることにつながります。
問7	<b>答え 1</b> <b>企業が株式や債券を発行し、金融機関を介さずに投資家から直接資金を調達する仕組み。</b>	直接金融は、資金の貸し手がどの企業に資金を提供するかを直接選択し、そのリスクも負うのが特徴です。これに対し、銀行が間に入って資金を融通する仕組みは「間接金融」と呼ばれます。日本では伝統的に間接金融の割合が高かったですが、近年は直接金融による調達も重要な役割を果たしています。
問8	<b>答え 1</b> <b>政府が公共投資を増やして仕事や需要を創出し、日本銀行が民間銀行から国債を買い取ることで市場の通貨量を増やす。</b>	不景気のときは民間企業の活動や家庭の消費が落ち込むため、政府は公共事業を増やす財政政策によって直接的な需要を生み出し、景気の下支えを図ります。これに合わせ、中央銀行である日本銀行は民間銀行から国債を買い入れる「買いオペレーション」を行い、代金として現金を供給することで市場の通貨量を増やし、金利を下げて企業が資金を借りやすくする金融政策を実施します。